

図書館・情報学分野におけるレビュー誌の比較

A Comparative Study of Review Journals in  
Library and Information Science

三井幸子

Sachiko Mitsui

*Résumé*

A number of the review journals are published in library and information science, but studies on them can be rarely found out.

The purpose of this paper is to determine the characteristics of review journals in this field.

In the present study, five review journals—*Advances in Librarianship*, *Annual Review of Information Science and Technology*, *Library Trends*, *Progress in Communication Sciences*, *Advances in Library Administration and Organization*—published in the last three years are examined in terms of the following points,

- (1) the number of bibliographic citations or references,
- (2) the distribution of titles cited in review articles,
- (3) time-lag between the time when each bibliographic citation or reference was originally published and the time when the review journal citing it was published,
- (4) the subject area covered by each review journal,
- (5) the affiliation of the author of each review article to determine the percentages of librarians and researchers.

The results show that review articles in one volume of *ARIST* cite more materials, which are recently published; informal communications are sometimes cited in *Library Trends*; the review articles in *Progress in Communication Sciences* have a weak connection with the ones in library and information science; and topics in *Advances in Librarianship*, *Library Trends* and *Advances in Library Administration and Organization* are similar to each other.

These results may be helpful for the people who study library and information science.

---

三井幸子：慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学修士課程，東京都港区三田 2-15-45  
Sachiko Mitsui: Graduate School of Library and Information Science, Keio University, Mita, Minato-ku, Tokyo.

## 図書館・情報学分野におけるレビュー誌の比較

- I. 図書館・情報学分野のレビュー誌
  - A. 現状と調査の目的
  - B. 種類
  - C. 先行研究
- II. 図書館・情報学分野のレビュー誌の調査
  - A. 調査対象
  - B. 調査項目・方法
  - C. 調査結果
- III. 図書館・情報学分野のレビュー誌の特徴
  - A. *Advances in librarianship*
  - B. *Annual Review of Information Science and Technology*
  - C. *Library Trends*
  - D. *Progress in Communication Sciences*
  - E. *Advances in Library Administration and Organization*
- IV. 図書館・情報学分野のレビュー誌の課題
  - A. 検索ツールの必要性
  - B. レビューアー
  - C. 調査研究の必要性

### I. 図書館・情報学分野のレビュー誌

#### A. 現状と調査の目的

「情報の洪水」や「情報の爆発」などと言われる近年の文献の増加は、研究者にとっては深刻な問題である。コンピュータが、大量の文献を比較的短時間に、網羅的に探せることを可能にしたとはいえ、必要とするすべての文献を入手し通読することや、文献の中の多量な情報を取捨選択して自分の研究に役立たせたり、分野の動向や将来の展望を把握したりすることは、研究者にとって極めて困難な状況である。このような状況に対処するために、あるテーマの文献を収集し、その内容を濃縮し、評価、統合する機能をもつレビュー論文は大変有用であり、主に自然科学分野の研究者達によって重要視され、盛んに利用されている。

図書館・情報学分野においても文献の増加は例外ではない。また図書館サービスの多様化や新しい情報技術の開発導入のために、研究者はたえず新しい有用な文献に目を通す必要があり、レビュー論文は大変有用なものである。現在、この分野には何種類かのレビュー誌が刊行されており、今後その活用の増大が見込まれるが、それらの研究は必ずしも多いわけではない。そこで本稿で

は、それらの有用なレビュー誌を研究者がより容易に利用できるように、各誌をいくつかの観点から調査し比較することにした。そして、それぞれの特徴を明らかにし、研究者がそれらを利用する際の参考となりうるような指針を示した。

#### B. 種類

現在図書館・情報学分野では、主にアメリカにおいて何種類かのレビュー誌が刊行されている。例えば、この分野の文献案内の1つでは<sup>1)</sup>、8つのレビュー誌が紹介されている。それらのレビュー誌の、編者、創刊年、出版者、刊行頻度をまとめたものが、第1表である。これによって、この分野の主要なレビュー誌はカバーされていると見てよいただろう。*Library Trends*の各号は特集形式で、あるテーマにおけるいくつかの多面的な論文から構成されているが、その中でテーマに関する先行研究が紹介されており、一つのレビュー誌といえる。『図書館・情報学のための調査研究法<sup>2)</sup>』でもこの雑誌がレビュー誌として挙げられている。

自然科学分野においては、1分野に1誌以上という具合に何種類ものレビュー誌が刊行され、わずかだが日本で刊行されているものもある。これに対して、人文・社

第1表 図書館・情報学分野のレビュー誌

誌名	編者	創刊年	出版者	刊行頻度
①	F.W. Lancaster	1952	Univ. of Illinois	季刊
②	Wesley Simonton	1970	Academic Press	年刊
③	Martha E. Williams	1966	Knowledge Industry Pub.	年刊
④	Brende Dervin・M. J. Voigt	1980	Ablex	年刊
⑤	G. B. McCabe・B. Kreissman	1982	JAI Press Inc.	年刊
⑥	Thomas A. Rullo	1980	Heyden.	年刊
⑦	Marcia Tuttle・Jean G. Cook	1986	JAI Press Inc.	年刊
⑧	H. A. Whatley	1958	Library Association	5年毎

1: 誌名は以下の通り

- ① Library Trends
- ② Advances in librarianship
- ③ Annual Review of Information Science and Technology
- ④ Progress in Communication Sciences
- ⑤ Advances in Library Administration and Organization
- ⑥ Advances in Data Base Management
- ⑦ Advances in Serials Management
- ⑧ British Librarianship and Information Work

会科学分野では、心理学、社会学において若干のレビュー誌が刊行されているだけである。その中で、図書館・情報学分野でこのように何種類ものレビュー誌が刊行されているのは、きわめて特殊な例であるといえよう。

なお日本で刊行されているこの分野のレビュー誌はない。そのため日本のレビュー論文は、原著雑誌に定期、不定期に掲載されるもののみである<sup>3)</sup>。

### C. 先行研究

図書館・情報学分野のレビュー誌に関する最も古い研究は、1969年に発表された Linda Harris と Robert V. Katter による *Annual Review of Information Science and Technology* (以下「ARIST」と略記) Vol. 1 の利用者調査である<sup>4)</sup>。これは情報学関係の研究者に、葉書による質問紙法と面接法によって調査を行い、ARIST の創刊が彼らに与えた影響を調査したものである。そして、読者の半数以上が ARIST の読後、以前一度読んだことのある文献の再吟味をしている、45%が ARIST によって今後の研究計画のための考えを示唆されたと回答している、などのことから ARIST Vol. 1 は明らかに研究者にある種の刺激を与えたことを実証した。

Rowena Weiss Swanson は、ARIST のレビュー論文執筆に関する調査を行った<sup>5)</sup>。彼は、彼自身の執筆活動に関して日記形態で記録したデータをまとめて、レビューアーの件数は \$7527.36 であると算出し、これに対してレビューアーが得る報酬は大変少ないことを指摘した。

以上は、レビュー誌の利用者と生産者、いわばレビュー誌を取り巻く人々についての調査・研究であったが、以下の2つは、レビュー誌の中身であるレビュー論文を調査・研究したものである。

Tefko Saracevic は ARIST 発刊5年目の時点で、ARIST (Vol. 1~Vol. 5) のページ数、論文数、レビューアーの所属、論文のテーマ、引用文献、レビュー論文の取り組み方について調査をし、5年間の成果と問題点を考察した。さらにそのうえで、ARIST に対する10点の勧告をしている<sup>6)</sup>。この論文に対して ARIST の編者である Cuadra がコメントを出しているのは大変興味深いことである<sup>7)</sup>。彼は、1巻の ARIST が刊行されるまでの過程を明らかにした上で、前記の Saracevic の論文について彼の意見を発表した。これは公の場で行われた、レビュー誌の利用者と、編者の一種の討論であるといえ

図書館・情報学分野におけるレビュー誌の比較

る。良いレビュー誌はこの両者によって作られるものであり、より有用なレビュー誌の刊行のために、こうした例が今後広く行われることが望ましい。

J. S. Kidd は、*ARIST* Vol. 8 を使用し、書誌事項、引用文献数、レビュー論文のページ数と語数などを調査して、量的分析によってレビュー誌の概要や特徴をとらえようとした<sup>8)</sup>。この論文では、*ARIST* は素材にすぎず、調査結果よりもむしろその研究方法が強調されているため、前の Saracevic の論文と異なり、*ARIST* への提言や勧告というものはない。

筆者が探索した限りでは図書館・情報学分野のレビュー誌の研究は、これまでにこの程度しか行われていない。さらに、そのすべてが *ARIST* についてであった。

最後に、*Current Research in Library and Information Science* (1987) によると、現在、カナダの Alvin M. Schrader ら Alberta 大学の研究チームが、*Advances in Librarianship* と *ARIST* に引用された雑誌について、ビブリオメトリクス的手法を用いて両者を比較する研究を行っているようである。研究期間は1987年から1988年となっており、その結果が大いに期待される<sup>9)</sup>。

II. 図書館・情報学分野のレビュー誌の調査

A. 調査対象

現在刊行されている、図書館・情報学分野の5種類のレビュー誌の、最近3年分についての調査を行った。対象としたレビュー誌は、以下の5誌である。これらはいずれも、3年以上継続して刊行されており、この分野で一定の評価を得ていると思われる。

1. *Advances in Librarianship*
2. *Annual Review of Information Science and Technology*
3. *Library Trends*
4. *Progress in Communication Sciences*
5. *Advances in Library Administration and Organization*

これらのレビュー誌の概要は、第I章で述べた通りである。本論文では便宜上、1. *AL*, 2. *ARIST*, 3. *LT*, 4. *PCS*, 5. *ALAO* と略記する。調査をした各誌の、巻数、刊行年、論文数、文献数は、第2表の通りである。

第2表 調査対象

	文献数	巻数	刊行年	論文数
AL	1595	Vol. 12	1982	8
		Vol. 13	1984	8
		Vol. 14	1986	9
ARIST	4455	Vol. 19	1984	10
		Vol. 20	1985	9
		Vol. 21	1986	9
LT	3260	Vol. 32	1984	21
		Vol. 33	1984-85	37
		Vol. 34	1985-86	39
		Vol. 35	1986-87	29
PCS	4529	Vol. IV	1984	8
		Vol. V	1984	9
		Vol. VI	1985	8
		Vol. VII	1986	9
		Vol. VIII	1986	9
ALAO	1210	Vol. 3	1984	12
		Vol. 4	1985	10
		Vol. 5	1986	11
		Vol. 6	1986	11

B. 調査項目・方法

前述の *ARIST* についての先行研究において、Saracevic と Kidd は、レビュー論文中に引用された文献の数と種類を分析している。これはレビュー論文によって、ある主題について書かれた文献の評価を知る際に、重要な視点となるだろう。また Saracevic は他に、雑誌タイトルの分布、レビューアターの所属についても調査している。確かにこれらの項目はレビュー論文の内容や特徴をよく反映していると考えられる。したがって、以上の項目は今回も調査をすることにした。さらにこれに加えて、同一分野内のレビュー誌の比較ということを考慮して、各誌に主に取り上げられる分野内の主題の相違についてと、各誌から知ることができる研究活動状況の新しさの程度を明らかにするために、レビュー論文に引用された文献の刊行年とレビュー誌刊行年の差について調査した。本稿ではこの差を便宜的に、タイムラグと呼ぶことにする。また、レビュー論文中に引用された文献（それらは多くの場合、レビュー論文の末尾にリスト化されている）を、他と紛らわしくない限り、引用文献と表記する。

調査には、各レビュー論文末尾の文献リスト (Reference または Bibliographies)、すなわち引用文献のリストを利用した。

各項目についての調査方法は、以下の通りである。

1. レビュー論文あたりの引用文献数と文献の種類

レビュー論文末の文献リスト中の全文献をカウントし、次に、記載されている書誌事項から資料の種類 (図書、雑誌論文、会議録、テクニカルレポート、インフォーマル・コミュニケーション、その他) を識別した上で、各種類ごとにカウントした。レビュー誌によって3年間の論文数がまちまちであることから、単純集計では比較できないので、カウントしたものを論文数で割り、1論文あたりの文献数をもとめた。

2. 雑誌タイトルの分布

同じ文献リスト中から雑誌論文を抜き出し、掲載されている雑誌タイトルで分類し、タイトルごとの論文数を調べて、よく引用されている雑誌の上位10タイトルを挙げた。

3. 主題範囲

2.の結果をもとにして、引用された論文数の多い順から論文数が全体の70%になるまでの雑誌タイトルを、主題で分類した。分類には、Ulrich's International Periodicals Directory (1986-87, 25ed.) における分類を用いた。

4. タイムラグ

文献リスト中の個々の文献の出版年と、その文献が引用されているレビュー誌の出版年の差をもとめ、次にこの差について、引用文献全体の中央値、最小値、最大値、平均値、最頻値をもとめた。さらに文献全体のタイムラグの分布状況についても見た。

5. レビューア어의所属

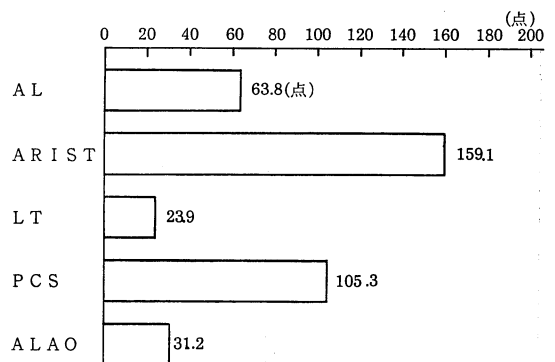
各論文に記載されているレビューア어의所属 (論文執筆時) を、図書館員、大学教員、その他、に分類してその割合を調べた。図書館員であり、大学教員でもあるレビューア어についてはその両方にカウントした。さらに、図書館員に関しては館種別の割合、大学教員に関しては図書館・情報学を専門としている人の割合を調べた。大学教員の専門は、その所属がライブラリスクールであれば、図書館・情報学専門の教員であるとみなした。またレビュー論文に記載のないものは、Who's Who in Library and Information Services (ALA, 1982) で補った。

C. 調査結果

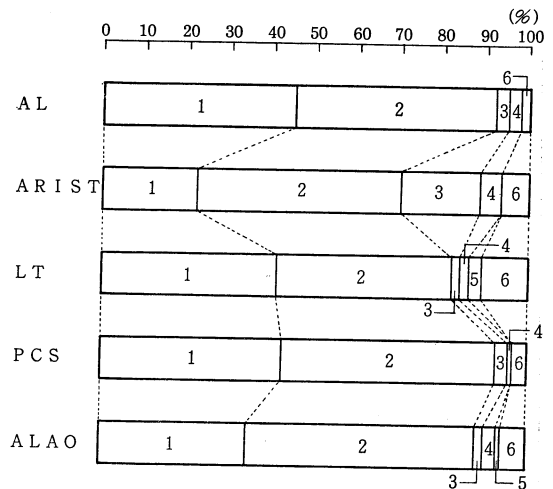
1. レビュー論文あたりの文献数と文献の種類

5誌の、1論文あたりに引用されている文献数を示したのが、第1図である。ARIST、PCS が多く LT が少ない。ALAO は、ARIST の約 1/5、AL の約半分である。これは、調査した44論文中で文献リストの無いもの、つまり引用文献の無いものが8論文あったことによる。

各誌の全文献数を100%として、文献の種類別の割合を示したものが第2図である。5誌ともに図書と雑誌論文がほとんどであるが、ARIST は他誌と比べて、会議資料、テクニカルレポートの割合が高い。「その他」に



第1図 レビュー論文あたりの文献数



1: 図書  
2: 雑誌論文  
3: 会議録  
4: テクニカルレポート  
5: インフォーマル・コミュニケーション  
6: その他

第2図 文献の種類別の割合

図書館・情報学分野におけるレビュー誌の比較

第3表 雑誌タイトルの分布

	順位	雑誌タイトル	構成比率
AL	1.	College and Research Libraries	8.6%
	2.	Library Resources and Technical Service	4.1
	3.	Journal of Documentation	3.4
	4.	Library Trends	3.3
	5.	Library Quarterly	3.0
	6.	Library Journal	2.8
	6.	Drexel Library Quarterly	2.8
	8.	JASIS	2.6
	9.	ARIST	2.5
	10.	Advances in Librarianship	2.1
10.	American Archivist	2.1	
10.	Journal of Academic Librarianship	2.1	
ARIST	1.	JASIS	7.7%
	2.	ARIST	3.9
	3.	Information Processing and Management	3.8
	4.	Communications of the ACM	3.1
	5.	Online	2.1
	6.	Journal of Documentation	1.7
	7.	Library Journal	1.6
	8.	Information Technology and Libraries	1.5
	8.	Byte	1.5
	10.	Database	1.4
LT	1.	Library Journal	7.6%
	2.	College and Research Libraries	5.2
	3.	Library Trends	4.6
	4.	Journal of Education for Librarianship	3.0
	5.	American Libraries	2.9
	6.	Library Quarterly	2.6
	7.	Publisher's Weekly	2.4
	8.	Journal of Academic Librarianship	2.0
	9.	Library Resources and Technical Services	1.9
	10.	Infoworld	1.8
PCS	1.	Journal of Communication	3.9%
	2.	Journal of Advertising Research	3.5
	3.	Journal of Personality and Social Psychology	3.4
	4.	Human Communication Research	3.1
	5.	Journalism Quarterly	2.6
	6.	Communication Yearbook	2.4
	7.	Communication Monographs	2.2
	8.	Communication Research	1.5
	8.	Public Opinion Quarterly	1.5
	10.	American Sociological Review	1.2
10.	JASIS	1.2	
ALAO;	1.	Library Journal	11.4%
	2.	College and Research Libraries	7.0
	3.	American Libraries	4.5
	4.	Public Libraries	3.7
	5.	ALA Bulletin	2.8
	5.	Journal of Academic Librarianship	2.8
	7.	Library Trends	2.4
	8.	Library Resources and Technical Service	2.3
	8.	Wilson Library Bulletin	2.3
8.	Library Quarterly	2.3	

は、学位論文、法令、非出版物、パンフレット類、などが含まれる。LT のこの割合が高いのは、調査対象となった1986年の特集にプライバシーや著作権に関するものがあり、それらの引用文献として法令が多かったことによる。また、ARIST 中の「その他」には、雑誌タイトルだけの引用で、特定論文への参照が明示されていないものが含まれている。このようなタイトルだけの引用は、他の4誌にはあまり見られないことであった。ここでいうインフォーマル・コミュニケーションとは、レビューアーと情報提供者の間の会話や手紙、インタビューのことである。この多くは LT に見られ、他に ALAO に若干見られるのみで、他の3誌には全く見られない。

## 2. 雑誌タイトルの分布

文献リスト中の雑誌論文の掲載雑誌について、上位の10タイトルを示したのが第3表である。PCS 以外は、いずれも図書館・情報学分野の主要雑誌である。ARIST、LT では、それ自身の論文を多く含んでいる。5誌にわたって重複している雑誌タイトルはないが、Library Journal は PCS 以外の4誌にみられた。逆に、他の4誌と全く重複していない雑誌タイトルは、PCS に10タイトル、ARIST に6タイトル、あとの3誌は2~3タイトルであった。雑誌タイトルに関しては、PCS、ARIST には独自性があり、他の3誌は似た傾向にあるといえる。特に PCS はかなり特異である。

第4表は、表頭に引用された雑誌論文全体に占める累積比率を、表側に個々のレビュー誌の収録雑誌タイトル全体に占める累積比率をとり、両者の関係を示したものである。これによって、引用された雑誌論文の掲載雑誌タイトルが、ある特定のものに集中しているのか、それとも多岐にわたっているのかを見ることができる。AL 以外の4誌はほぼ似た傾向にあるが、AL は一貫して雑誌タイトル数の割合が高い。これはつまり、AL が他誌

に比べて、相対的に多数の雑誌タイトルから論文が引用されているということである。

## 3. 主題範囲

各誌の主題範囲は本来ならば、個々のレビュー論文の内容を調査することによって、明らかにするべきである。しかし、作業に要する手間や、一貫性のある内容分析が困難であるなどの理由から、やむをえず今回のような調査方法を採用した。しかしこの結果は、各誌の主題範囲をとらえる目安にはなるであろう。結果を第5表に示す。当然のことながら、図書館・情報学分野の占める割合は高い。しかし PCS は例外であり、心理学、コミュニケーションの占める割合が高く、図書館・情報学は9番目(3.9%)にすぎない。また ARIST ではコンピュータの占める割合が高いことも注目される。AL、ARIST、LT、ALAOの4誌の図書館・情報学分野を細分してみると第6表のようになる。ARIST 以外の3誌の上位は全く似た傾向をしめしているが、それぞれの3位以下をみると、AL はドキュメンテーション、LT は図書館運営、ALAO は公共図書館と、これらに違いが見られる。LT では占める割合は低いが、他誌にはない学校図書館があるのは特徴的である。

## 4. タイムラグ

レビュー論文に引用された一次文献は、執筆者によって収集・評価・整理統合されたものであるために、他の抄録・索引誌のような二次資料に比べてタイムラグが大きくなることは免れない。しかし、レビュー誌にはその分野の最新の活動状況を知ることができるというカレントアウェアネス機能があり、最近の文献がどの程度引用されているかは、レビュー誌の利用者にとっては大いに関心のあるところである。タイムラグを比較する場合によく用いられる中央値、最小値、最大値、平均値、最頻値をもとめた結果が第7表である。また、第3図には引

第4表 掲載雑誌タイトル数の割合

引用論文数の累積比率	10(%)	20	30	40	50	60	70	80
AL	0.5(%)	2.0	3.9	5.9	9.3	14.7	22.5	37.7
ARIST	0.4	1.0	2.1	4.0	7.1	12.1	19.6	32.7
LT	0.3	1.1	2.2	3.9	6.4	11.2	18.2	32.1
PCS	0.5	1.1	2.5	4.4	7.1	11.5	18.2	32.0
ALAO	0.5	1.0	2.6	4.6	7.7	13.3	22.1	37.4

図書館・情報学分野におけるレビュー誌の比較

第5表 主題範囲

	順位	主題範囲	構成比
AL	1.	図書館・情報学	88.5%
	2.	歴史—南北アメリカ	3.2
	3.	社会学	2.0
ARIST	1.	図書館・情報学	52.4%
	2.	コンピュータ	29.6
	3.	コミュニケーション	5.1
	4.	電気学・電気工学	2.6
	5.	ビジネス・経済	2.5
	6.	科学	2.3
LT	1.	図書館・情報学	78.3%
	2.	コンピュータ	6.3
	3.	事業・経営	4.0
	4.	出版・図書販売	3.5
	5.	教育—高等教育	2.4
	6.	心理学	2.3
PCS	1.	心理学	27.9%
	2.	コミュニケーション	18.6
	3.	社会学	8.9
	4.	広告	6.9
	5.	教育	6.8
	6.	事業・経営	5.5
	7.	社会科学	5.3
	8.	ジャーナリズム	4.3
	9.	図書館・情報学	3.9
	10.	政治学	2.2
ALAO	1.	図書館・情報学	86.5%
	2.	公共行政	4.8
	3.	心理学	4.6
	4.	事業・経営	3.3

第6表 図書館・情報学分野の細分

	順位	主題	構成比
AL	1.	図書館・情報学一般	49.3%
	2.	大学図書館	17.1
	3.	ドキュメンテーション	14.8
	4.	図書館運営	6.8
	5.	専門図書館	5.0
	6.	情報・コミュニケーション	4.1
	7.	図書館・情報学 研究・教育	1.8
	8.	読書・各種情報メディアの利用	0.9
ALIST	1.	ドキュメンテーション	52.7%
	2.	図書館・情報学一般	26.7
	3.	情報・コミュニケーション	12.4
	4.	専門図書館	3.6
	5.	図書館運営	2.8
	6.	大学図書館	1.7
LT	1.	図書館・情報学一般	61.3%
	2.	大学図書館	17.8
	3.	図書館運営	5.1
	4.	ドキュメンテーション	4.8
	5.	専門図書館	3.2
	6.	学校図書館	2.3
	7.	情報・コミュニケーション	1.7
	8.	公共図書館	1.7
ALAO	1.	図書館・情報学一般	67.0%
	2.	大学図書館	12.7
	3.	公共図書館	6.6
	4.	図書館運営	4.3
	5.	ドキュメンテーション	4.0
	6.	図書館・情報学 研究・教育	3.3
	7.	専門図書館	1.5

用文献の全体的なタイムラグの分布状況を示した。横軸はレビュー論文に引用されるまでの期間(タイムラグ)、縦軸は文献数の全体に占める割合である。中央値とは、それより新しい文献と古い文献の量が等しくなる時点であり、総体的に引用文献の新しさを比較するのに他よりも適した指標である。というのは、たいていのレビューアーは最新の文献を引用しており、最小値は0となり比較にならず、また、たまたま極端に古い文献が引用されていると、その文献のために最大値が大きく変化し、平均値はそれに影響されてしまうからである。結果から、ARIST, LT の中央値は3年で、この2誌は比較的新しい

い文献が引用されていることがわかった。そしてその後、4～6年の開きがあって AL, PCS, ALAO と続いている。古い文献がどの程度含まれているかを見るのには、最大値、平均値とタイムラグの分布が目安になる。LT は、平均値が高く、分布のグラフでは20年以降の文献の割合が高いので、古い文献も多く引用しているようである。ARIST はこれとは対照的に平均値が低く、文献は新しいものに片寄っている。AL は平均値が高いが、これは1800年代の極端に古い文献がいくつか引用されていたためである。あとの2誌は似たような傾向にある。なお、ALAO の最小値は1年で、これはレビュー誌の



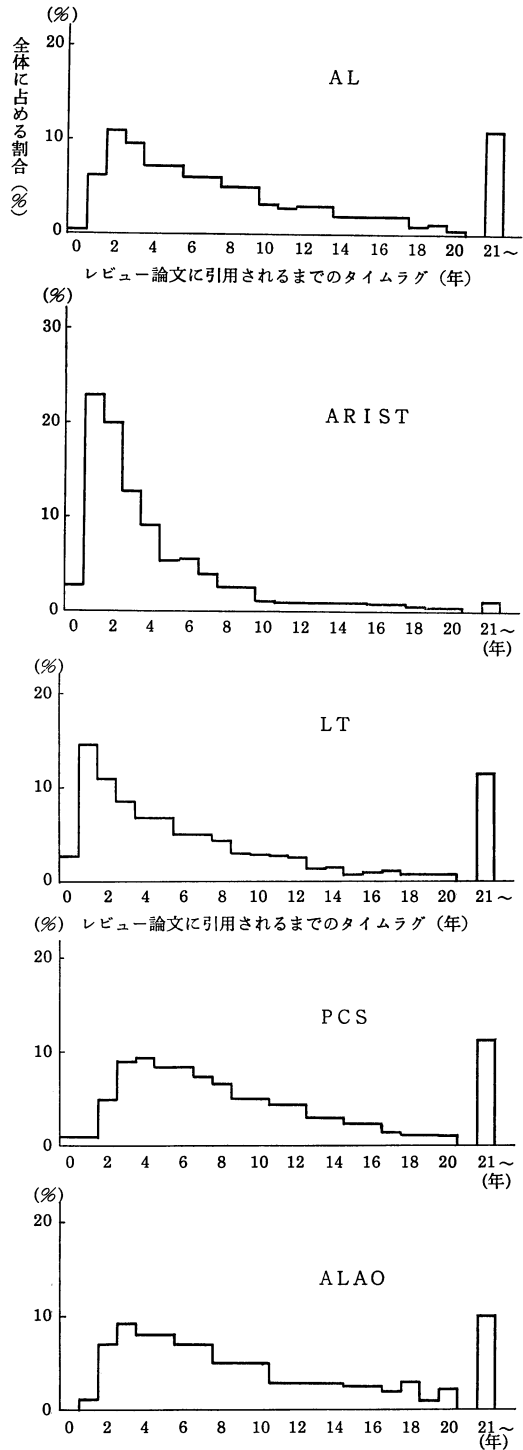
第7表 タイムラグ

	最大値	最小値	平均値	中央値	最頻値
AL	102(年)	0(年)	40.9(年)	7(年)	2(年)
ARIST	60	0	4.4	3	1
LT	118	0	56.3	3	1
PCS	71	0	10.1	8	4
ALSO	86	1	11.6	9	3

刊行年の文献が全く引用されていないことを示している。

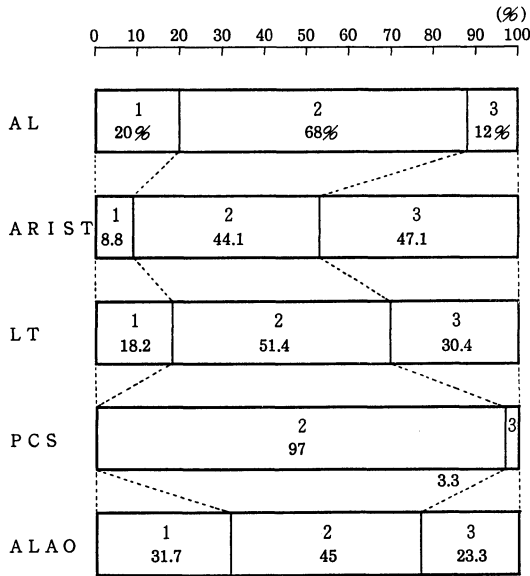
5. レビュアーの所属

分野に関わらず、レビュアーには、フォーマル、インフォーマルな幅広い文献・情報の収集ができ、かつ権威ある専門家として認められている人といったような、厳しい条件がある。しかし、労力的・時間的なレビュアーの大きな負担に対する報酬が少ないため、こうした資格のある人達がレビュー論文の執筆にやや消極的な態度を示しており、このことがレビュー論文の深刻な問題点として指摘されたこともある<sup>10)11)</sup>。では図書館・情報学分野においては、実際にはどのような人々が執筆しているのだろうか。レビュアーの所属を図書館員、大学教員、その他に分類してみた結果が、第4図である。その他には企業、American Library Association, National Science Foundation 所属の人々や、コンサルタントとして活動している人々が含まれている。全体的に図書館員が少なく、大学教員が多い傾向であるが、ARIST ではその他が大学教員を若干上回っている。図書館員についてその館種を見ると、AL 80%, LT 66.7%, ALAO 84.1% と、ほとんどは大学図書館員であるが、LT では公共図書館員の割合が22.2%と、他誌に比べて大きい。大学教員の専門は、PCS 以外はやはり図書館・情報学分野が圧倒的に多い。PCS では図書館・情報学分野以外の専門家が89.7%も占めており、そのうち約70%はコミュニケーション分野の専門家であった。なお、ARIST については図書館員やライブラリースタールの教員ではない人が多かったため、図書館員と館種別の割合、大学教員の専門分野については、ここでは特に言及しない。



第3図 タイムラグの分布

図書館・情報学分野におけるレビュー誌の比較



1: 図書館員 2: 大学教員 3: その他

第4図 レビューア어의所属

III. 図書館・情報学分野のレビュー誌の特徴

前章で述べた調査結果の概要を第8表に示す。ここでは、この調査結果に基づいて、比較によって明らかになった各レビュー誌の特徴と、研究者が各レビュー誌を利用する際に参考となるような指針を考察していくことにする。

A. *Advances in Librarianship*

一般的に調査結果は、5誌の中では平均的なものであり、とくに際立った特徴はみられない。文献数は1論文あたり63.8点で、5誌の中では中程度の量であるが、その種類では、図書と雑誌論文が二分しており、それ以外は極めて少ない。しかし掲載雑誌タイトルは多岐にわたっており、雑誌論文に関しては、未知の文献を知る可能性は高いのではないかと考えられる。また、1800年代の古い文献が比較的多く引用されているのは特徴的である。本誌は、代表的な図書館学のレビュー誌と言われているが、主題範囲でARISTでは1位のドキュメンテーションが、本誌においても14.8%と高い割合を占めていることは注目できる。

B. *Annual Review of Information Science and Technology*

1論文あたりの引用文献数が約160点で、5誌の中では一番多い。その上、図書、雑誌論文の他に、会議資料、テクニカルレポートなどが多く引用されている。文献数が多く、種類が豊富であるということは、本誌の大きな特徴である。レビューアerは執筆の際にかなり広範囲な文献収集を行っているようである。ただし、引用文献は圧倒的にレビュー誌刊行年から2~3年前までのものであり、10年前以降の文献はほとんど引用されていない。このことは本誌だけにみられたことであり、Annual Reviewとしてのその編集方針によるものと考えられる。したがって本誌は、ここ数年の間に発表された文献の評価を知る際に有用であるといえる。本誌は情報学分野専

第8表 調査結果の概要

	文献数とその種類	雑誌タイトルの分布	主題範囲	タイムラグ	レビューアer
AL		タイトルの種類が豊富	図書館・情報学一般 ドキュメンテーション	1800年代のものを 含む	
ARIST	数が多い 種類が豊富		ドキュメンテーション コンピュータ	小さい	企業・団体の職員 が多い
LT	数が少ない インフォーマルコ ミュニケーション が多い		図書館・情報学一般 図書館運営	小さいが古いもの も含む	公共図書館員の割 合が高い
PCS	数が多い	図書館・情報学の 雑誌が少ない	心理学 コミュニケーション	大きい	コミュニケーション の専門家が多い
ALAO	数が少ない		図書館・情報学一般 公共図書館	最新のものは刊行 年の1年前	

門のレビュー誌として有名であるが、このことは、コンピュータ、ドキュメンテーションの割合が高いという今回の調査結果からも実証された。またレビューアーは、企業や研究機関に所属の人が、他誌に多い大学教員を上回っている。このレビューアーについての結果と、前に述べた図書・雑誌論文以外の資料が多く引用されているという結果は、先に Saracevic や Kidd によって行われた調査結果とほぼ一致していた。ゆえに、本誌のこれらの特徴は、創刊以来のものであるといえよう。

### C. Library Trends

1 論文あたりの文献数が最も少ないが、これは各号が、決められたテーマに関して書かれた平均7～8点のレビュー論文を集めて編集されている、いわゆる特集形式のためであろう。つまり、他誌の各レビュー論文には、あるテーマの全般的な概要が書かれているのに対して、本誌の個々のレビュー論文はそのテーマの中の一側面について書かれているため、1つのレビュー論文の長さは短く、文献数は少ないのである。また、数値的には示せないが、各論文が同じテーマで書かれているために、いくつかの論文に重複して引用された文献が数多く見られた。文献リストは個々のレビュー論文末にあるだけなので、テーマについての文献を知りたいという利用者にとっては、あまり有用とはいえない。このような編集をするならば、1冊の中で引用されたすべての文献リストまたは索引を付けるなど、有用な書誌としての工夫が欲しいところである。本誌の論文には、レビューアーが手紙やインタビューなどのインフォーマル・コミュニケーションで得た情報が他誌よりも多く引用されている。このために、利用者はレビュー論文を読むことによって、出版では得られない情報を入手できる可能性がある。これは本誌の大きな利点である。主題範囲は *AL*, *ALAO* と重なっている。タイムラグは他誌よりも小さいが、一方で20年以上前の文献も多く引用されている。本誌は他誌と異なり年4回刊行されているが、今回の調査ではそれによって影響されたと考えられる結果は出ていない。しかし、主題範囲の重複している *AL*, *ALAO* がともに年刊であるために、本誌のこの刊行頻度には意義があるといえる。

### D. Progress in Communication Sciences

*PCS* は主にその主題範囲の面で、かなり他誌と異なる結果が見られた。結果をまとめると次のようになる。

- 1) 雑誌論文の掲載雑誌タイトルの種類は多いが、上位10誌のうち図書館・情報学分野の雑誌は1誌 (*JASIS*) のみであった。
- 2) 主題範囲は本誌のタイトルに表されているコミュニケーションや心理学の占める割合が高く、割合では図書館・情報学は9番目であった。
- 3) レビューアーは大学教員がほとんどであるが、そのうち図書館・情報学を専門とする人は10.3%とわずかである。

これらのことから、本誌は図書館・情報学分野のレビュー誌といわれているにもかかわらず、図書館・情報学との関わりは極めて薄いといえる。本誌は図書館・情報学に近接する別の分野のレビュー誌としてとらえたほうがいいのではないだろうか。本誌を利用するにはこのことを心に留めておく必要がある。その他の特徴としては、文献数は100点以上であり多い方だが、図書、雑誌論文以外の文献は少ない、タイムラグは5誌の中で最も大きい、などがある。

### E. Advances in Library Administration and Organization

レビュー1論文あたりの引用文献数の平均が約30点と少ないのは、引用文献のないレビュー論文が、調査した44論文中8論文もあったことによる。その一方では、135点もの文献を引用しているレビュー論文もあり、レビュー論文間の文献数には大きなばらつきがあるようである。したがって、本誌によってあるテーマの参考文献を知ることができるか否かは、そのテーマについて書かれたレビュー論文次第ということになる。さらに文献の種類は、図書と雑誌論文が圧倒的であり、タイムラグは他誌より大きく、また、引用文献中で最も新しいのは、レビュー誌が刊行される1年前のものであった。これらのことから、引用文献に関しては本誌は必ずしも十分ではないといえる。主題範囲は *AL*, *LT* と重複している。タイトルから図書館運営関係が中心のレビュー誌ととらえがちだが、その割合は他誌と比べて決して高いとはいえない。図書館運営に関しては *LT* や *AL* にもよく取り上げられているようであり、この主題について知りたい研究者はタイトルにとらわれずに、まず *LT* や *AL* を利用すべきかと考えられる。というのは、*LT* にはインフォーマル・コミュニケーションでレビューアーが得た情報が引用されており、また *AL* は本誌よりも引用文献数が安定しており、雑誌論文が多種類の雑誌から引用

されているという利点があるからである。引用文献においても、主題範囲においても、本誌の結果は何か中途半端である。5誌の中ではもっとも新しいレビュー誌であるにもかかわらず、斬新さが見られず、ALの補助として利用できるという程度のものであると言わざるを得ない。

## V. 図書館・情報学分野のレビュー誌の課題

最後に、今回の調査を通して考えられる、図書館・情報学分野のレビュー誌の課題を3点挙げておきたい。このような課題の解決によって、レビュー誌の存在価値はますます高まることになるう。

### A. 検索ツールの必要性

今回の調査において、AL, LT, ALAOの主題範囲が重複していることが明らかにされた。つまり、これらの主題範囲(図書館・情報学一般)について知りたい利用者は、この3誌のいずれかから自分の必要とするレビュー論文を見つけ出さなければならない。しかし現在ではレビュー論文の検索ツールは不十分であり、図書館・情報学分野の代表的抄録誌LISAもレビュー誌は収録していない。したがって、図書館・情報学一般に関するレビュー論文を求めようとするならば、これらの3誌に掲載されるすべてのレビュー論文に目を通した方がよい。さらに、レビュー論文はレビュー誌だけでなく、定期的に、または不定期に原著雑誌にも掲載されている。その中に、必要とするレビュー論文がある可能性もある。1次文献に関しては図書館・情報学分野でも抄録・索引誌が完備され、その探索は比較的容易であるのに対して、レビュー論文についてはこの点がはなはだ不備であるといえる。レビュー論文の需要の増加に伴って、今後レビュー誌に掲載されるレビュー論文も、原著雑誌のレビュー論文も、その数は増加していくであろうことを考えると、どんなレビュー論文がどこに掲載されているかを示すツールは是非とも必要である。レビュー論文数の多い医学や科学の分野では *Bibliography of Medical Reviews* や *Index to Scientific Reviews, Medical Chemistry Reviews, a select bibliography* などの様々な検索ツールが刊行されている。こうしたツールを研究し、手本とすれば、図書館・情報学分野におけるこのようなツールの作成は決して不可能なことではない。

### B. レビューアー

調査の結果、レビューアーは全般的に、大学教員が大規模な企業や団体に所属している人達であった。それにしても5誌の内3誌が主題範囲に図書館を含んでいるわりには図書館員のレビューアーが少なすぎる。これは必ずしも図書館員に資格が伴わないということではなく、レビュー論文執筆の負担の大きさから考えると、図書館員には執筆の余裕がないためと考えることができる。数少ない図書館員の中でも規模の大きい大学図書館員がほとんどであること、公共図書館員の割合が他と比べて高かったLTの個々のレビュー論文は、他誌と比べてページ数、文献数が少なく、したがって執筆の負担も軽いだらうと推測できることなどは、このことを裏付けているのではないだろうか。図書館・情報学の研究には大学や機関の人々ばかりではなく、当然図書館の現場で働く職員も参加する必要がある。特に、図書館の役割、活動、技術、運営などに関する研究において、図書館員は重要な存在である。図書館員の立場で文献の評価がなされ、その意見が盛り込まれたレビュー論文がもっと書かれることによって、この分野のレビュー論文は内容面で、今よりもさらに多様化されたものになっていくのではないだろうか。レビュー誌の編者や学会などは進んでこの点に対する具体的な方策を考えていくべきであろう。

### C. 調査研究の必要性

現在までに発表された図書館・情報学分野のレビュー誌に関する文献は、第I章で示した4点にすぎない。そして、それらすべてARISTを調査したものであった。レビュー誌・レビュー論文の調査研究は自然科学分野においても数は少ないといわれている。レビュー誌と同様に二次資料に属する抄録・索引誌や書誌などの調査研究は、従来から様々な観点からなされているのに対して、これは極めて対照的なことである。現状では各レビュー誌は出版者の意のままに刊行され放題といった感がある。いかに利用されるのか、利用者はどんな要求を持っているのか、編集上で改善点はないのか、などについてを指摘するデータがそろっていない。こうした状況を打開するために、客観的な調査研究は是非とも必要なことである。数々の調査研究の成果は編者に還元されることで、結局は研究者自身がより有用なレビュー誌を利用できることになるのである。さらに、図書館・情報学分野では人文・社会学分野としては異例と言ってよいくらいに、数種類のレビュー誌が刊行されている。この分野

のレビュー誌の活発な利用は、他の分野にレビュー誌が波及するための大きな刺激となるかもしれない。

- 1) 武者小路信和. “参考文献案内：図書館・情報学” 書誌索引展望. Vol. 9, No. 3, p. 36-39 (1985).
- 2) 緑川信之ほか. 図書館・情報学のための調査研究法. 東京, 勁草書房, 1986, p. 202. (図書館・情報学シリーズ 5)
- 3) 例えば『図書館学会年報』には、不定期ではあるが「文献展望」として館種・テーマ別のレビュー論文が掲載されている。また『図書館界』では50号ごとに過去10年間における日本の図書館・図書館学の発展をテーマとした特集号を発行している。他に、『書誌年鑑』も「年間展望」として過去1年間に発行された書誌類に関するレビュー論文を掲載している。
- 4) Harris Linda; Katter, Robert V. “Impact of the Annual Review of Information Science and Technology”. Proceedings of the ASIS Annual Meeting, No. 5. New York, Greenwood Publishing Co., 1968, p. 331-333.
- 5) Swanson, Rowena Weiss. “A Work Study of the Review Production Process”. Journal of the American Society for Information Science. Vol. 27, No. 1, p. 70-72 (1976).
- 5) Saracevic, Tefko. “Five years, five volumes and 2345 pages of the Annual Review of Information Science and Technology”. Information Storage and Retrieval. Vol. 7, p. 127-139 (1971).
- 7) Cuadra, C. A. “Comments on: Five years, five volumes and 2345 pages of the Annual Review of Information Science and Technology by Tefko Saracevic”. Information Storage and Retrieval. Vol. 7, p. 141-146 (1971).
- 8) J. S. Kidd. “Introspective bibliometrics: an analysis of the eighth Annual Review of Information Science and Technology”. Redundancy in scientific and technical literature: final administrative report: British Library Research and Development Department grant SI/G/124. Cranfield, England, Cranfield Institute of Technology, 1976, Appendix B, 20p.
- 9) Current Research in Library and Information Science. Vol. 5, No. 4, p. 11 (1987).
- 10) American Psychological Association. “Informal Study of the Preparation of Chapters for the Annual Review of Psychology” Project on Scientific Information Exchange in Psychology. Report No. 2, p. 34-37 (1963).
- 11) Virgo, Julie A. “The Review article; Its characteristics and problems”. Library quarterly, vol. 41, no. 4, 1971, p. 275-91 (1971).